目次

第一章　チャーチルと歴史……1
第二章　家族と青年時代……19
第三章　陸軍　一八九四―一九〇〇年……39
第四章　議会　一九〇〇―一〇年……63
第五章　中核の時代　一九一〇―一五年……83
第六章　戦争と平和　一九一五―三二年……103
第七章　戦争の到来　一九三三―四〇年……123
第八章　ひとりきりの首相　一九四〇―四一年……143

第九章　ビッグ・スリー　一九四一―四五年……167
第一〇章　神格化……189
参照文献　213
訳者あとがき――伝記の文化とは　217

第一章　チャーチルと歴史

チャーチルは、戦時に若かった人々にとっては、途轍もないスケールの人物のように見えたかもしれない。若者は英雄を求めるものだが――包囲下のイギリスで学校の生徒であった者にとっては――首相はおよそ英雄とは見えなかった。英雄とはカーキ色の軍服か、海軍、空軍のブルーの軍服を着て通りを行く人たちのことで、すらりとした丈夫な体で、笑みを浮かべ、戦場から戻ってきたばかりか、これから出発するかであった。不格好な防空服に、何だかおかしなシルクハット、ぶよんとした指の間に例の煙草をはさんだチャーチルは、およそ戦士とは見えなかった。大人たちの「ウインストン、頼りにしてるよ」という追従の声は苛立たしいだけだった。戦時の生徒が見たかったのは老いたウインストンではなく、若々しいウインストンであった。近くの飛行場から飛び立つパイロットのように、訓練のために近くの道を全力疾走する突撃隊員のように、海峡で戦うために近くの港から出ていく魚雷艇のキャプテンのように、さっそうとした誰かであった。そうした手本とくらべてみると、頬のたれた、耳障りな声の、肥満気味のウインストンはどうしようもない人物としか映らなかった。

戦後何年かのウインストンはさらにひどかった。国民の願いに対する反応には品がなく、一九四五年には政権を失い、みじめな敗北者のイメージがついてまわることになる。若い人々は、親の世代の政治的な意見や自分たちのそれが何であったにしても、勝利した労働党の約束する社会革命の刺戟に心を揺さぶられずにはいなかった。それと対立する政治家であったチャーチルは、それが打ち出した社会主義に対してきわめて否定的な立場をとった。若い人々は社会主義の提案をそのまま受け容れてしまった。すべての人々に対する無料の公共医療というのは文句無しにいいことと思えたし、親の支払い能力とは関係なしに、必死に勉強する頭のいい子には学校や大学の奨学金を出すというのも、高齢者や貧困層にこれまで以上の年金を出す、スラム街の住民に新しい住宅を、戦前の不況をくぐりぬけた人々に安定した雇用を、というのもそうであった。労働党は自分たちこそよりよいイギリスを代弁するのだと言い、若い人々もそれを信じた。社会主義化したイギリスは悪化するだろうというチャーチルの警告は不信感をかきたてただけであった、少なくとも、将来の世代の間では。

私もその世代のひとりであって、学校、大学時代を通じてチャーチル伝説にはまったく反応しなかった。そのチャーチルは一九五一年には公職に戻り、何度か健康上のトラブルに見舞われたものの――一度は動けなくなりかけたものの――一九五五年まで首相の地位にとどまった。その立ち直りのさまには眼を見張るものがあった。あとを継いだのは政治上の息子にして後継者とも言うべきアントニー・イーデンであったが、彼が大臣職に採用したのは、戦時のチャーチル内閣でさまざまの職位に就いて政治という仕事を学んだ若い人々の多くであった。そのような若返り策にもかかわらず、イー

デンによる戦後のチャーチル内閣の継続は新しい有権者の心をつかむことができなかった。新しい有権者層には、彼ならびにその仲間が古い意味でひどく保守党的であるように見えたのだ、対外的には伝統的な帝国主義で、国内的には利己的な保守主義であるように。「スエズ動乱」は――スエズ運河とそれが貫流するエジプトの国に半植民地的な支配を再度押しつけようとした一九五六年の試みを、イギリス人は今もそう呼んでいる――チャーチル主義の最後の悪あがきの指標でもあったように思える。このスエズ危機は国を二分した。年長の人々には、この軍事攻撃は、イギリスがその歴史を踏まえて行使できるはずの帝国権力のしかるべき再現と見えたかもしれないが、若い人々には、それは、歴史的な過去のものでしかない帝国的な権威をふりまわす下卑た行為と映った。いずれにしても、スエズでの失敗は海の彼方に向かうという叙事詩の終焉を画すものとなったが、チャーチルはその長い人生を通じてその旗を振り続けたのであった。チャーチルの代弁したもののすべてに、スエズが終息を告げたのである。

自分の教育の終点まで来たとき、たしかに私はそのように考えていた。ところが一九五七年の暑い夏をニューヨーク・シティで過ごしていたとき、たまたまあるエピソードが、私が育った時代のこの政治家の評価を一変させてしまうことになった。私は合衆国を回る旅に出ていたが、それは、私と同じオックスフォード大学のカレッジを卒業していたアメリカの博愛家による資金援助を受けてのことであった。その人のおかげでできた旅行奨学金をもらったもうひとりの学生を、私は待っていた。外

国にひとりで出かけるというのはそれが最初のことで、それ以前にフランスに出かけたときは学校の先生とか、家族の知人と一緒だった。私の借りた部屋というのはユニオン・スクウェアを見渡せる場所にあったが、そこは当時はまだくすんだ商店地区の真ん中であった。所有主はどこかに出かけていて、私の知っている人は誰もいなかった。数日間は時間をもてあましてしまい、孤独で――青年期特有のというのか――落ち込んで、方向を見失っていた。アメリカはまだ落ち着いていないものの、戦争疲れで後ろ向きのイギリスよりも物的にはずっとスマートで、モダンだったし、精神的にはずっとエネルギッシュで、自信にあふれていた。数週間前にあとにしたイギリスは間違いなく没落傾向にあったのに対して、私が足を踏み入れたアメリカは、富の面でも、世界的な力を享受するという面でも、明らかに昇り景気であった。おまけに、不在の主たちはアメリカのエリート世界に、アイヴィー・リーグや、『ソーシャル・レジスター』や、ニューヨークの格好のいい知的な世界に属していた。彼らをメンバーとする階級はこれから地球を継承しようとしているのに対して、私のそれは、一世紀にわたってグローバルな支配をやったあと、別れの言葉を口にしようとしていたのだ。

私はそこにあるＬＰレコードの中に――イギリスから来た人間にはこれも新鮮だった――自前の憂鬱をなぐさめてくれる音楽を、ベートーヴェンの『エロイカ』やブルックナーの第七交響曲を見つけた。そこにある重い音は、なじみのない、なかばトロピカルな暑気と一体化した無気力さを強くするだけだった。それから、私は別のものを見つけだした、『ウインストン・チャーチルの戦時下の演説』というレコードだ。ニューヨークの格好いい人々の所有物に混じって、こんなつまらない、重苦

しい、もったいぶった代物が何をやってるんだろう、私はそう自問してしまった。元首相の、区切りだらけの長々しい演説がいったい何を訴えるというのだろうか。純粋な好奇心にかられて――私は一九四〇年のチャーチル氏を記憶しているという年齢ではなかった――私はそのレコードをターンテーブルにのせて、聞き始めた。

電流が体を走ったようなショックだった。針が選んだのは、ＢＢＣが国民向けに放送した一九四〇年五月一九日のチャーチルの演説であった。その声が誰のものであるかはすぐに分かった。その言葉のもつ力、霊感はそうではなかったが。「首相として初めて皆様にお話しいたします」と、彼は語り始めた。今ならば、私はこのくだりを暗唱できるけれども、あのとき私の耳に届いた迫力は、フランスの戦いの壊滅的な日々に第三共和国が最後の瞬間を間近にし、英国海外派遣軍（ＢＥＦ）がすでにダンケルクに完全撤退していたときの不安な聴衆の耳に届いたものと同じものであったに違いない。「首相として初めて皆様にお話しいたします［間］、我らが祖国と、我らが帝国と、我らが同盟国、そして何よりも自由という大義を守るために、この厳粛なるときに」。三つの重い音――「祖国」、「帝国」、「同盟国」――と、劇的な、ゆるやかな音、「自由という大義」。

私は背筋がピンと伸びるのを感じた。その声はテンポを変え、ゆるやかな調子から朗誦へ移行する。

恐るべき戦いがフランスならびにフランドルで進行しております。ドイツ人は［チャーチルはドイツ人という言葉を脅威感と侮蔑感をまじえて発音する技術をもっていた］空からの爆撃と重装備の

戦車をあざとくも組み合わせて[「あざとくも」は、チャーチル特有の形容詞で、軽蔑の念も含んでいることが多い――「現代芸術のあざとい例」というのが、一九五四年に議会から献呈されたグレアム・サザーランド作の自画像に対する彼の判断であった]、すでにマジノ・ラインの北でフランスの防衛線を突破し、強力な武装車の列が、当初の一両日間、防衛力を失った国土において破壊の限りを尽くしております。彼らは深くにまで侵攻し、恐怖と混乱をあとに残していきます。

その後方から歩兵連隊がトラックで姿を見せ、更にその後方から巨大な軍団が迫っております。首相チャーチルに危機が迫っているにもかかわらず、兵士チャーチルは軍の作戦行動の展開するさまとドラマ性を、背筋の冷たくなるような見事な筆致で語らないではいられないのだ。

そのあとでまた雰囲気が変わり、国の統一を求めることになる。「過去においては我々の中にも違いがあり、争いも起こりました。しかし、今、ひとつの絆が我々すべてをひとつに結びつけます――勝利を得るまで戦うということです、どれだけの犠牲を払い、どれだけの苦痛に直面しようと、隷属と屈辱に身を任せないということです」。結びにはひとつの約束が来る、「勝たなくてはなりません、勝つのです」。

そのレコードを聞きながら、ニューヨークの六月の夕暮れの重苦しい暑さの中で、私は窓枠にもたれていた。その次の一九四〇年六月一八日の演説は、亡命中のド・ゴールが祖国の人々に自由なるフランスのために闘おう、最後の勝利を信じようと訴えたのと同じ日に行なわれたものであった。

ヒトラーは[この名前の発音は喉から吐き出すような感じで、のちに有名なものとなった]、この島で我々を破らなくてはならない、さもなくば敗戦するということを承知しております。もし我々が彼に対抗することができるならば[これはヴィクトリア時代の詩人ヘンリー・ジョン・ニューボルトが学校の生徒たちのスポーツ精神を謳いあげたVitai Lampadaを踏まえたもので、この詩は言われる以上に英国人の多くを鼓舞した]、すべてのヨーロッパが自由になり、世界は日のあたる広々とした高台に向かって前進するでありましょう。しかし、もし失敗したならば、合衆国も含めて、世界全体が……新たなる暗黒時代の奈落に沈むことでありましょう……それゆえ我々はみずからの義務に立ち向かい、大英帝国と英国連邦が一千年存続したあかつきには、「これこそが最高の時だったのだ」と人々が言えるように振る舞おうではありませんか。

私は祖国に対するそれまで味わったことのない誇りで満たされ、次には、並みの人間ならば圧倒的な力をもつ敵との妥協を模索しそうなときに、そのような勇気を感じて、みずからが率いている人々にも同じ勇気を求めることのできる人物と同じ国の市民であることへの誇りで満たされた。そのために、彼こそ真の指導者精神を体現していることを、私は疑わなかった。そこには絶えずいくつかのテーマがあった。ヒトラーの軍隊が海峡の彼方にぼんやりと浮かびあがり始めた暗黒の日々にひとつの挑戦として提示されたものが、五年にわたる戦争のあらゆる段階で繰り返されるのだが、そのときの

説明で使われた言葉が繰り返しレコードから流れたのだ。困難と苦悶、日の光と希望、そして最後にくる征服と勝利などが、それである。首相としての庶民院での最初の演説では、「血と苦汁、涙と汗」を提唱しただけであった彼は、それとほとんど同じ勢いで、息を呑むような広がりをもつ政策と目標も宣言していたのである。「我らの政策とは何かという問いには、海で、陸で、空で全力を振り絞って戦うことであると、私は言いたい……我らのめざすところは何かという問いには、一言で答えたい、勝利である！と。いかなる犠牲も惜しまぬ勝利、いかなる恐怖にもたじろがぬ勝利、いかに遠く困難な道にも屈することなき勝利、と」。一九四〇年五月一三日に、そう言われていたのである。六月四日には彼は庶民院において、その生涯で最も有名な演説をする。英国海外派遣軍のダンケルク海岸からの撤退はまさに完了しようとしていた。兵隊たちはかろうじて銃だけをかついで海峡横断を完了し、ドイツ軍によるイギリス侵略を迎え撃つのに必要となる重装備――大砲、戦車――はすべてあとに残してきていた。国内には代用品も、予備も、防備もなかった。遅ればせながらつくられた民兵組織である国土防衛軍にいたっては、長柄の三叉や熊手を使って準備するというありさまであった。激しい爆撃がいつ何どきあるやもしれなかったし、ドイツの上陸艇からなる海峡横断艦隊もいつ来るか分からなかった。島は実質上、無防備であった。どう冷静に考えてみても、イギリスの眼の前には敗北しかなく、合理的に判断する限りでは、どんな条件を突きつけられようとも、和平に向かうということであった。しかしながら、チャーチルは断固として降伏を拒絶する。

「我々は衰微しない、衰退しない」と、彼は力説した。「我々は最後まで進み続ける……いかなる犠

牲を払っても、我々の島を守る。我々は海辺でも戦う、上陸地でも戦う、野で、街路で戦う、丘で戦う。我々は断じて降伏することはない」。これらの言葉を聞いた人々は決してそれを忘れることはなかったという。その言葉のリズム、その声の質、そして、とりわけ、「断じて降伏することはない」の「断じて……ない」の抜群に挑戦的な響きを。その場にいた者たちの体に電流が走った。そしてその衝撃は議員たちから口伝えに一般の人々にも届いて、オックスフォード大学の哲学者アイザイア・バーリンが、チャーチルの「意志と想像力を国民に」迫ることになったとするプロセスが動き出したのである。その伝わり方は「実に強烈なもので、国民は最後には彼の理念にすり寄り、自分たちを彼の眼で見るようになった」のである。

彼は国民をどう見ていたのだろうか。貴族であったチャーチルは民衆の人チャーチルでもあったが、いずれの場合でも、そのすぐ下には必ずロマンティックな人チャーチルがいた。彼はみずからの国の歴史をロマンティックなものとして扱い、それによって国民をもロマンティックに扱った。軍人としてのチャーチルは、第四軽騎兵隊の若き将校として、小説家キプリングの描いた、帝国の長年の一兵卒トミー・アトキンズのことも知っていた。そのキプリングの『三人の兵士』に出てくるのは――リアロイド、オーゼリス、マルヴァニー(頑固なヨークシャー男、いやみなロンドン男、気まぐれなアイルランド男)は、チャーチルには馴染みの人物でもあった。彼も、キプリングなみに、無愛想さ、極端さ、人種的な劣者への侮蔑といった彼らの欠点に気がついていたはずである。逆に、愛国主義、腹立たし

い目上の者にさえ見せる忠誠心、勇気、有力なフェアプレイの精神など、彼らの美徳にも気がついていた。若い時期に闘った選挙区オールダム、マンチェスター、ダンディーなどの保守党の労働者階級との交流も、イギリス人には自分たちの連合王国という理念を信ずる気持ちがあるという彼の思いを強化した。一兵士として、イギリス的な男らしさについても学んだ。強い女性たち――ジェニー・ジェローム・チャーチル、エリザベス・エヴェレスト夫人、クレメンタイン・ホージア(最初の女性はイギリス国民となったアメリカ人である)――の息子として、最愛の養育児として、夫として、女性たちの内奥にある深いイギリス性を、彼にとっては勇気と粘り強さと究極の道徳的な節度のあらわれであるイギリス性を、理解するようになったのだ。

戦時の偉大な演説の中で繰り返されることになるテーマも、それとつながっている。例えば、犠牲心を呼びかけ、やがて来るはずの困難を警告することや――一九四一年六月の、「いかに事態が悪化しているかを喜んで聞くのはイギリス国民のみであります」――現実にはそぐわないときにも、勝利の約束を繰り返すとか。一九四〇年五月一三日、西部戦線におけるドイツ側の猛攻撃が英仏軍に壊滅的な事態をもたらし始めたとき、「いかなる犠牲も惜しまぬ勝利、いかなる恐怖にもたじろがぬ勝利、いかに遠く困難な道にも屈することなき勝利」をめざすことを、彼は宣言した。一九四五年五月九日、つまり、その五年後に、ついにヨーロッパで勝利が宣言されたときには、彼はホワイトホールのバルコニーから、路上の群衆にこう語りかけた。「すべての人々に神の祝福を！　これは皆さんの勝利です……すべての人々が、男の人も、女の人も、全力を尽くしてくださいました。長きにわたる歳月も、